

人及び作家としてのシェイクスピア

豊田, 實

<https://doi.org/10.15017/2556519>

出版情報 : 文學研究. 35, pp.1-33, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



人及び作家としてのシェイクスピア

豊 田 實

この一文は昭和二十年十月二十九日の九州帝大に於ける私の定限年齢記念講演のために草したものであるが、是を同月十三日に七十七歳で他界された岡田哲藏先生の靈に捧げる。

私が福岡へ来るに就いては、同先生の御意見を伺つたものであり、世田谷のお宅を訪問して、大過なく九大で二十年間務めて定年に達したことを御報告したのは、前月の末であつた。

なほ簡潔を旨とし且つ我が國に於けるかゝる種類の論説に倣ひ、文中に擧げる現代の學者批評家等に對しても、敬稱學位等を省略したことを諒とせられたい。

シェイクスピアといふ家名の英語の綴は、類似の發音のものを合すれば、數十通りあり得る。當面の問題たる詩人の場合、その遺言狀の署名では——彼は一六一六年に物故し、その署名は甚だ讀みにくいのである——Shakspeare となつてゐる。然し彼の生前に出版された或る脚本——尤も彼が責任を以て出版させたものではないが——の扉には Shakspeare 又は Shakspeare (P の前の S には "long s" が使用されてゐる) となつて居り、死後出版の第一全集（一六二三—一六三三年）でも Shakspeare と綴られてゐる。それで今日ではこの綴が多く使用されるけれども、遺言狀の署名を固守す

る學者もある。但し文字及び文字をかく事に關する當時の人々の考へは―後でなほ述べるつもりであるが―現代の吾々とは餘程ちがふのであつて、詩人自身果して常に一定の綴を使用したかも知れないと思ふ。ともかく Shakespeare は同じ家名の數十通りの綴中最も長いものであり、従つて重味を添へるためにも、出版者は好んでこの綴を採用したとも考へられる。且 Shrike と speare との間にハイフエンを入れると槍を振るといふ意味が一層浮き出て來る。さうしてこの點に關してはスペンサー (Spenser)、ベン・ジョンソン (Ben Jonson) その他の當時の詩人達もシェイクスピアの名前が「勇ましく響く」ことを指摘してゐる。なほ sphere も spear の古期英語の形であり、詩人シェイクスピアの祖先に武勳を立てた人があつて、かうした姓を與へられたやうにも考へられるかもしれぬが、溯つてこの家名の源を考へて見ると、さう簡單には説明出來ないのである。詩人シェイクスピアの姓に似た古い家名としては Saxberd, Shagspere, Shaxbere, Shakespur, Shexper, Chacspur, Saxper, Shaxber, Shaxberd 等が擧げられるが、かうなると原意は容易に決し難く、好著 Shakespeare's Family を公にしたストープス夫人 (Mrs. Stopes) は「シェイクスピア」といふ名の源は千古の霧に隠されてゐる (The origin of the name "Shakespeare" is hidden in the mists of antiquity) と云つてゐる。かう匙を投げて了へばそれ迄であるが、或る學者は、シェイクスピアの家名を稱する人々の間には、ノルマン人の間に多い個人名が頻繁に見られることを指摘して、その關係からその家名の意味を考察してゐる。(例へば William は Conqueror 自身の名であると同時に、詩人初めシェイクスピアの家名を有する多くの人の名でもある。)この事實は、吾々をして、詩人の祖先は「征服者ウィリアム」が英國をその治下に置いた結果北フランスのノルマンディから英國へ渡つて來た人々のうちにあつたのではないかとの想像を起さしめる。さうしてさういふ見地からノルマンディ

の記録が調べられた結果によれば、一二〇〇年頃 William Sakespée なる者が、當時英國王の支配下にあつた北フランスに住んでゐたことになつてゐる。(彼は自ら返す見込の立ちかねる程の金をリチャード王から借りてゐるやうに記されてゐる。)ノルマンディにおけるシェイクスピア姓の綴には前記の Sakespée の外に Saquespée 等が見られるが、saquer は即ち sacher で、「勢よく引き抜く」の意であり、espée は épée の古形で刀の意味である。且ノルマンディの記録中に Sake Espée, Sake espée とさふやうに離して書いてあるもののある事は、この家名のこの意味を一層明かにするものである。さうして見れば「シェイクスピア」のノルマンディにおける語源の意味は「槍を振る」ではなく、「勢よく太刀を抜く」といふのである。さうしてこれが少しく變形して英國で Shaspere になり Shakespeare になつたとの想像は必ずしも無理ではあるまい。

それでは英國におけるシェイクスピアといふ家名の記録はどうかといふと、その最初の例は一二四八年の William Saksper に關するものである。さうしてその記録によれば、この男は詩人の故郷たるウァリックシア (Warwickshire) のストラトフォード・オン・エイヴン (Stratford-on-Avon) を去る七哩のクロプトン (Crompton) の住民であつたが、強盜の罪で絞殺されたといふのである。但し之が詩人の祖先であつたといふ證據は全然なし (Lee のシェイクスピア傳の冒頭參照)。次に一二六〇年には Simon Shakespene の名が錄され、一二七八年の Simon Saksper も同一人らしい。これ以後この姓はウァリックシア及びその附近の地方に頻繁に見出されるのである。以上の次第であるから詩人の祖先も或はノルマンディから英國へ移住して來たものであつたかもしれない。ノルマンディは北フランスであるけれども、ノルマン人の血管には北歐人の血が混じて居り、英國へ移住してからはアングロ・サクソンの血も混じたのである。

從つて若しシェイクスピアの祖先がノルマンディの出身であつたとすれば、彼の血統は英國に住む種々の種族の血の融合混和であつた筈である。

シェイクスピアといふ家名の來歴は前記の次第であるが、然し詩人シェイクスピアの家に關して明確に知られてゐるのは、祖父の時代からである。祖父リチャード (Richard Shakespeare) は、ストラトフォード・オン・エイヴンを去る約四哩のスニタフィールド (Snitterfield) の農夫で、その近くの裕福な郷土ロバート・アーデン (Robert Arden) の小作をしてゐた。リチャードの嗣子ジョン即ち詩人の父の青年時代は、その郷里で農夫として過されたらしいが、一五五二年頃彼は志を立て、當時人口二千の前記のストラトフォード (二十世紀初頭の人口は八千三百) に移つた。さうして其の町での彼の主な職業は手袋屋であつたが、手袋の材料の關係かららしく白革の鞆屋と稱せられ、且羊毛の取引もし穀類及一般農産物も取扱つたやうである。ストラトフォードに於ける彼に關する最初の記録は一五五二年四月のもので、それによると彼はヘンレ通 (Henley Street) のその家の前にごみを堆積したままにしてゐたために、他のもう二人の町民と共に、十二ペンスの罰金に處せられてゐる。(彼の事蹟が細大洩さず調べ上げられるのは、彼が大詩人の父親となつた因果である。) 彼のこの家はその後十二年經つて詩人シェイクスピアが生れた所であつたが、この頃はジョンはまだ獨身で、この家も借家であつた。然し彼はその後次第に成功してストラトフォードに二軒の家を買ひ、一五五七年には父親の主人ロバート・アーデンの末の娘でロバートが生前特に鍾愛してゐたメアリ (Mary) と結婚した。このアーデン家はストラトフォードを去る約三哩のウィルムコート (Wilm(c)ote) に在つた舊家で、その家系はサクソンの君主アルフレッド大王に迄溯り得るのであつた。この結婚の結果長男として生れたウィリアムが後の大詩人であるが、教

會の嬰兒洗禮の記録には 1564, April 26, Guilelmus, filius Johannes Shakspeare と記されてゐる。即ち之は後の大詩人が洗禮を受けた日附であつて誕生の日は正確には知られないのである。然し彼の命日が四月二十三日であるのと、當時の慣例として幼兒は生後三四日を経て洗禮を受けたところから、詩人の誕生日は命日と同月同日であつたやうに坊間には傳はつたのである。なほヂョンの家庭では長男ウィリアムの誕生前二人の女の子が生れたが、何れも幼なくして死んだので、母親はウィリアムの健康には極力注意したであらうと思はれる。(なほ序にヘンレ通の此の家庭に、長男に續いて生れた子女の名を、誕生の年と共に記せば次の如くである—Gilbert (1566), Joan (1569), Anne (1571), Richard (1574), Edmund (1580).)

詩人の父ヂョンはその商賣が繁昌すると共に、町の政界でも重きをなし、一五六五年には參事會員となり、一五六八年から七一年にかけては町長の役を務め、その任が満ちて後は參事會の長に選ばれた。然し今日の考へでは不思議に思はれるかもしれないが、かうした要職にあつたに拘らず、當時の記録調査の結果彼の署名が遂に發見されない。彼は自分の名の代りにしるしを附けたり十字をかいいたりしてゐる。それで彼は自分の名前が書けなかつたのではないかと想像されるが、もしそうであつたとしても、それは當時としては別に不思議ではなかつたのである。當時は大抵の市民は文字を書く面倒な仕事は所謂祔筆に任せたのであつて、詩人の父親の、人としての有能さはその經歷が之を證して余りあるのである。但し記録の示す所によれば一五七七年頃から彼の家運は傾き始めたものの如く、その後彼の經濟狀態は益々悪くなつた。一五七七年は後の詩人ウィリアムが十四才目に入つた年で、グラマ・スクール(恰も十六世紀の頃主としてラテン語を教へる爲に各地に設けられた Grammar School)の課程も終りに近づいた頃であつた。

それでウィリアムは郷里のその學校を卒業する迄、或は少なくともその課程の大部分を終る迄は、學校に通はせられたであらう。それで彼は満十四才即ち聲がはりの頃迄學校教育を受けた筈である。シェイクスピアの學問的教養に關しては、ベン・ジョンソンが but little Latin and less Greek と言つたことが余りにも重く視られて、彼は非常に無學であつたやうに考へられ、シェイクスピア即ちベイコン説まで出るやうにもなつたのであるが、彼の作品として傳はつてゐるものが、實際彼のものであることは、内證外證からみて疑を挟む余地なく、彼が決して無學でなかつたことは種々の點から考へ得られるのである。例へばブランデン(Edmund Blunden)の Shakespeare's Significances と題する小論文を讀んでも、シェイクスピアがラテンの作品を如何によく讀んでゐたかゝわかる。と同時にこの論文はブランデン自身の博覽強記をおのづから示すものでもある。又シェイクスピアはフランス語も(之は後でロンドンで會話も多少勉強したらしいが)よく讀めたらしい。

さて十四歳で學校生活を終つた詩人のその後の經歷はどうであつたか。彼の傳記中このあたりは不明のまゝに残されてゐるが、恐らく初めは家業の手傳をし、家の商賣も愈々やつて行けなくなつてからは、丁稚奉公に出されたかもしれず、その場所は同じストラットフォードに於ける父親の友人肉屋のタイラー(William Tyler)の家で、詩人は此處で牛を殺す「秘術」を覺えたのかもしれない、と想像する者もある。それはともあれ、次に詩人が郷土の記錄に跡を止めてゐるのは彼の結婚である。早熟の彼は十八歳半にして、近郊シタリイ(Shottery)の農家の娘アン(Arne Hathaway)と結婚してゐる。しかもこの婚姻は手続もできるだけ省略して大急ぎで決行された。花嫁は彼より八歳の年上で、結婚後六ヶ月にして(一五八三年の五月には)初兒のスザナ(Susanna)が生れたことから顧みれば、結婚を

急いだ理由も頷かれるであらう。さうしてそれから二年後の一五八五年にはハムネット (Hamnet) とデューデイス (Judith) の雙生児が生れたが、この二児はその名の示す如く男女であり、舊日本の迷信からいふと所謂畜生腹であつたが、英國にはさうした迷信はなかつたやうである。

以上の次第でシェイクスピアは一五八二年の暮、満十八歳半で結婚生活に入り三児を挙げたのであるが、その後數年、また彼の傳記の暗黒時代が続くのである。然し彼の家庭を雙生児が賑はした一五八五年の後七年、一五九二年の秋には、ロンドンの文士ロバート・グリーン (Robert Greene) は(その死後に發表された) 誇張的な懺悔録「百萬の後悔をもつて買はれた鏢錢一文の叡智」(Groatsworth of Wit, bought with a Million of Repentance) のなかで、シェイクスピアを次のやうに揶揄してゐる—An upstart Crow, beautified with our feathers, that with his Tiger's heart wrapt in a Player's hide, supposes he is as well able to bombast out a blank verse as the best of you; and, being an absolute Johannes factotum, is in his conceit the only Shake-scene in a country. この一文のなかにはシェイクスピアの名は出てゐないけれども、之が彼を罵つたものであることは、極めて明白である。即ち先づ「俳優の皮に包まれた猛虎の心」といふ文句は、たしかにシェイクスピアの『ヘンリー六世第三部』第一幕第四場一三七行の *Oh, tiger's heart wrapt in a woman's hide!* を捩つたものであり、又「彼はうぬ惚れて鳥なき里のたゞ一人の劇壇震撼者を以て自ら任じてゐる」と云つたその *Shake-scene* なる語も亦、明かに 'Shakespeare' から來てゐるのである。即ちこの一節は大學出身の文士の一人であつたグリーンの、學歴もない田舎出のシェイクスピアが短時日の間に名聲を博するに至つたことに對する妬みを反映するものであつて、彼はシェイクスピアを以て、グリーン達のいはゞ孔雀の羽で上邊

を飾つた俄出世の鳥であるとして、彼を罵つてゐるのであるが、その半面シェイクスピアがその頃英國の劇壇で大人氣を博してゐたことを證するものである。即ち是を以て見れば、詩人は一五八五年と一五九二年の間に、故郷を去りいつの間にカンドンに來て、劇作家としてもはやされてゐたのである。

詩人が故郷を飛び出した原因としては、サー・トマス・ルーシー (Sir Thomas Lucy) の莊園から鹿を盗み出したためといふ想像説が有力である。(この傳説には、そのため詩人がその莊園の主から叱られたので、彼を揶揄した俗謡を作つて益々事態を悪化せしめ、故郷に居たたまれなくなつたといふ口碑の羽まで生えてゐる。) この説に對しては、シェイクスピアの標準的傳記作者とされてゐるリー (Sir Sidney Lee) なども賛意を表してゐるが、是は俄に信じ難い傳説のやうである。是に關しては十七世紀の末の記録があるといふリーの考へは寧ろ誤りで、十八世紀の切めのロー (Rowe) のシェイクスピア傳がこの事を記した最初の文獻であるとする米國コーネル大學のアダムズ教授の説が正しい様である。従つて是は詩人の死後相當の歳月を経て出來た傳説としか思はれず、シェイクスピアの劇『タイタス・アンドロニカス』の第二幕第二場九二、三行に鹿盗みのことが出てゐるのは、だから詩人が鹿を盗んだといふよりも、是があるがために彼の傳記中に鹿盗みの傳説が出來たとみるべきであらう。又『ウィンザッの陽氣な女房達』のなかの判事シャロー (Shallow) を以て前記のサー・トマスを諷刺したものとなす見方も、詩人が鹿を盗んでこの田舎紳士に油を絞られたといふ前提が成立してこそ、初めて意味をなすものである。

尙シェイクスピア傳中、前記數年の空虚の少なくとも一部を滿たし得るかもしれぬ有力な他の一説は、オーブリー (Aubrey) の列傳中のシェイクスピア小傳のなかに見出されるものである。この小傳集は一六八〇年に完成した寫本

であるが、そのなかで、著者はシェイクスピアに關して「ベン・ジョンソンはシェイクスピアはたゞ少しのラテンとそれ以下のグreekを知つてゐたに過ぎないと言つてゐるけれども、彼はラテンがかなりよく解つたらしい。彼は若い時代田舎で學校教師をしてゐたのだから。」と記してゐる。オーブリのこの傳記はシェイクスピアの同僚の子供から材料を得たものらしく、信用に値するもののやうである。さうしてシェイクスピアのラテン作家に關する知識の豊富さ確實さと、學校で教はつたことが身につくのは、自ら教へることによつてゐるといふ多くの人の經驗を思ひ合せる時、シェイクスピアが故郷を出て、一時何處かで教師をしてゐたといふことは、頗るありさうなことである。

一五九三年の春及び翌年の春、彼は續け様に二篇の叙事詩を發表して當時の知識階級にもその文才を認めらるに至つた。即ち『ヴィーナスとアドーニス』及び『リュークリースの貞操蹂躪』であつて、前者はギリシヤ神話に材を取つて美少年アドーニスに對する女神ヴィーナスの戀を描いたもの、後者はローマ古代史に據つて武將タークニアスの烈婦リュークリシアに對する暴行を主題としたものである。後者は死を以て婦人の恥辱を贖つた貞操を頌ふる趣旨のものではあるが、二篇共に感覺的抒情的色彩の濃厚な點では一致して居り、之が當時の知識人の好尚に適合したものの如くである。即ちその頃のケイムブリヂの大學劇(The Return from Parnassus)の作者は一大學生をして「愚かな世人はスペンサアやチャールサアを尊重するもよからう。然し僕はうましき大家シェイクスピアを崇敬し、その『ヴィーナスとアドーニス』を枕の下に置いて寝るんだ」と言はしめてゐる。この二篇は決して作者の傑作と稱し得るものではないが、彼は之を以て上流社會にも認められるに至つた。是等の詩は英國文士の慣例に従つて貴族(この場合はサウサンプトン伯(Earl of Southampton))に捧げられ、詩人は今後同伯の眷顧を得ることとなつた。なほ後で述べ

るシェイクスピアの一連の十四行詩もこの頃から書き始められたものの如くである。

以上二篇の叙事詩が矢繼早に發表されるに至つたのは、一五九三年の夏以來、疫病流行のため英國中央の芝居小屋が凡て閉塞されたためもあつたが、疫病が終熄して劇場が再開されると共に、シェイクスピアはチェイムバレン卿保護の下にあつた劇壇に入つた。(在來のシェイクスピア傳では、彼は初めてロンドンへ出て來て屬した劇團も是であつたとされてゐるが、アダムズ教授等の調査の結果では、彼は初めベムブルク伯の劇團 (The Earl of Pembroke's Men) に屬してゐたが、この劇團は疫病流行のあふりを喰つて解散したので、彼は今度新たにチェイムバレン劇壇に入つたとされてゐる。) この劇壇の當時の本據はロンドン郊外シャディツチ (Shoreditch) の舞臺座 (The Theatre) であり、此の後三年間にシェイクスピアはこの劇場のために『リチャード三世』『リチャード二世』『眞夏の夜の夢』『ローミオとジュリエット』及び『ヴェニスの商人』をかいだ。一五九七年同劇團は近くのカーテン座 (The Curtain) に移り、此處で恐らく『ヘンリー四世第一、第二部』及び『ヘンリー五世』が初めて上演された。次に同劇團はもつとロンドンの中心に近いサザク (Southwark) のテムズ (The Thames) の岸に土地を借りて地球座 (The Globe Theatre) を建て、それが一五九九年の夏完成した。地球座では先づ三つの喜劇『から騒ぎ』『十二夜』及び『御意のまゝ』が上演され、その後五年間に『デューリアス・シーザ』『ハムレット』『マクベス』『オセロ』及び『リア王』等の大傑作が次々に上演された。尙この間に、エリザベス女王崩じてジェイムズ一世の治世となるや、シェイクスピアの屬してゐたチェイムバレン劇團は王室劇團 (The King's Men) に昇格した。この頃は劇作家としての彼の全盛時代で、その收入も又大したものであつたらしい。詩人としての天才を有した彼は、一面貨殖の心掛においても決して人後に落ちないのであつたから、此處で一應彼の收入を調べてみることも強ち無意味ではあるまい。

(一) 先づ、彼は當時一流の

俳優バーベジ (Barbidge) と肩を並べる役者でもあつたので、王室劇團附屬俳優としての収入が年百八十磅位であつたらしく、(二)劇場に對する投資者としての配當が約八十磅と見做されてゐる(ブラックフライヤーズ座からの配當が三十磅以上といふことが判つて居り、地球座の方の配當額は不明であるが、この劇場は前者よりも大きいので五十磅位と見積られてゐる。)(三)劇作家としての収入が三十磅(當時主要作家の一作に對する謝禮が十五磅で、彼は年平均二篇を書いた。)(四)當時の劇團は大入滿員の出し物に對しては、興行二日目(又は三日目)の収入から實費を差引いたものを作者に與へる慣例があつたので、この方からの収入が年三十磅と見られてゐる。)(五)エリザベス女王及びジェームズ一世共に演劇の愛好者で、朝廷への出演も度々あつたので、この方からの収入をリイーは年十磅と見積つてゐる。)(六)そのほかに彼は王室俳優の一員として年三磅六志八片を給與され、又王室伺候員(彼は演技以外で外國使臣の接待なども仰せつかつた)として給與二磅十二志四片を賜つたのであつた。それでこの方の収入が合計殆んど六磅であつた。)(七)最後に彼は郷里における投資からも収入があつた。即ち彼は郷里に買つた土地家屋及び金を貸したもののからの収入が概略年十二磅と見積られてゐる。以上の七項目の總計は三百八十六磅となる。さうして當時の金錢の購買力は近世(第一次歐洲大戰後)の十二倍とされてゐるので、假に一磅を時價拾圓とみてその十二倍とすれば、シェイクスピアの全盛期における年收は四萬六千圓といふことになる。且作家としての彼も亦、當時一流の大家と認められ、同時代の文藝評論家ミヤーズ (Francis Meres) はその著(一五九八年の Palladis Tamia)において、彼をローマの喜劇作家プロタス及び悲劇作家セネカに比肩させ、シェイクスピアは悲喜劇何れにおいても最も優れた劇作家であると言つてゐる。尤もミヤーズのこの著は彼と同時代及び少し以前の英國の詩人を褒めをやしてゐるのであ

るから、シェイクスピアの場合も、彼の讃辭必ずしも當時の文藝批評を代表するものとは言へないかもしれぬが、少なくともシェイクスピアの人氣を證するものとは言ひ得るであらう。

かうして全盛期に達した彼は一六一一年か、或はそれより少し以前、花々しい首都の生活を後にして郷里ストラトフォードに引退し、その後はロンドンへは要件を足しに時々出るのみであつた。しかも彼はその數年前から引退の用意をしてゐたものの如くでもある。即ち一五九七年にはその郷里における最大の家の一つであつたニュー・ブレイスを六十磅で買ひ求めてゐる。なほ此處で彼の郷里における家庭のことを一言すれば、彼の妻アンは在來の傳記では彼のロンドン生活中故郷に置きざりにされてゐたと考へられてゐるが、前記のアダムズ教授等は、主として詩人のロンドンにおける家屋税の額から割り出して、詩人は首都生活の或る期間家族を呼び寄せてゐたとの想像をめぐらしてゐる。但し之には確證はない。雙生兒の一方である息子ハムネットは十一才で夭折し、他方のデューデイスは婚期が後れて家庭の心配の種であつたが、詩人の死の直前に三十才で二十六才の青年と結婚した。是よりさきに長女スザナは當時有名な醫師であつたジョン・ホールに嫁してゐた。このスザナは詩人の父とはちがつて署名も残して居り、教養あり敏智にたけた婦人で、父詩人の愛娘であつた。かうした身内が居り、なほ舊友のゐる故郷に、シェイクスピアが錦を着て引退したのが一六一一年とすれば、それは彼の四十七才の時であつた。彼がこの若さで人生の第一線を退いたことについては、彼の健康が衰へたためとの想像もなされてゐる。現に彼は引退後ロンドンへ出た或る場合（一六一四年の十一月）娘婿の醫師ホールを同伴した事實も知られて居り、又彼の死に方にも持病のあつたことを思はせる節がないでもない。さうしてその病氣は、今日の醫學から考へれば、ブライト病（一八二七年にブライト博士によつて

明らかにされた一種の萎縮質たる *Beth's disease*）ではなかつたかと言はれてゐる。ともかく詩人シェイクスピアの死に關しては信賴すべきジョン・ワード（大學出身で十七世紀にストラットフォードの牧師をして居り、その檀家中には詩人の二人の甥や一人の姪もあつた）の書き残したものがあり、それによれば、「シェイクスピア、ドレイトン、ベン・ジョンソンの三人が集つて歡を盡したが、その際飲み過ぎたらしく、シェイクスピアはそれから發した熱で死んだ。」とされてゐる。この三人の楽しい集ひは一六一六年の三月初めの頃であつたらしいが、同月二十五日には彼の容體は非常に悪化し、彼は遺言狀に大切な變化を施すために頼みつけの法律家コリンズ（*Francis Collins*）を呼んだのであつた。然し遺言狀を全部書き改めて貰ふために指圖をする氣力はなく、前月結婚した娘デューデイスに關する項の記されてゐる初めの一葉のみを書き變へさせ、残りの二枚は彼の口授によつてあちこちに筆を加へさせたにすぎなかつた。彼はその後一時持ち直してなほ數週間生き延びたが、四月二十三日に遂にこの世を去つた。

茲で彼の遺言の内容に就いて一言すれば、彼の遺産の大部分は長女のサザナ・ホールに行き、ニュー・プレイスの家屋敷も彼女に残された。それでは詩人の夫人のアンに關してはどうであつたかといふと、前記加筆の際、思ひ出したかの如く *I give unto my wife my second-best bed, with the furniture.* とだけ書き足してある。之は果して好意なのか皮肉なのか、後世の史家の甚だ苦しむ點であるが、善意解釋もあり得ないことはない。即ち英國の法律によれば、未亡人は、別に遺言狀中に明文がなくても、夫の死後その所持品の三分の一及び不動産の三分の一を嗣ぎ、且未亡人自身の存命中残された主な家屋敷に住居することが許されるのであつた。且シェイクスピアがその娘婿のジョン・ホールに後事を託してゐたことは、ホール夫妻のその後のアン未亡人に對する世話の仕振りからもわかるといふのである。

且ベスト・ベッドでなく二番目によいベッドをその附屬物と共に妻に残すといふことをそれ自體にも亦、善意解釋が成立つのであつて、それによれば、要するに最上のベッドは客用であるので、見た上では一番立派であるに相違ないが、然し恐らく實用の上で最も寢心地のよいのは二番目のベッドであり、かうしたわけで、詩人シェイクスピアはその糟糠の妻を決しておろそかにしたのではないと言ふのである。然し人によつては、さういふ善意解釋は上辻りで、その裏には何かあるのではないかといふ疑も起るかもしれず、又現にさうした想像はシェイクスピアの十四行詩の解釋にも頭を出して來るのであるが、之はなほ後で説明しようと思ふ。

以上の次第で、主要な作品だけでも二篇の叙事詩、三十九篇の劇、百五十四首の十四行詩を残し、當時の人々に *sweet* また *gentle* と呼ばれ、後世の批評家に、 *myriad-minded* と賞揚された稀代の詩人シェイクスピアは五れば、墓男にもよく理解出来るかうした平易な碑銘が必要であつたのである。即ち教會の内部の面積は限られてゐる



十二才の若さで遂に此の世を去つたのである。さうして彼は故郷の教會内の要所に葬られ、屍躰は木造の棺に納めて教會の床即ち地面に埋葬され、その上の平石には、或は彼の自筆とも言はれ、少なくとも自ら撰した次の文句が彫まれた――「善き友よ、イエスに免じて差し控へよ、此處に埋められしなきがらを掘りあばくことを。是等の石に手觸れぬ人に祝福あり、わが骨を動かす者に呪ひあれ。」此の碑銘は絶世の詩人のものとしては、如何にも平凡ではないかとも思はれるかもしれないが、それにはまたわざわざ平凡にした有力な理由があるのであつて、自身の骨を發掘されまいとす

ので、折角その床下に埋葬されたものも、後になつて他の有力者の家族の遺骸を収める必要を生じた場合、掘り出されて骨堂に投げ入れられることが實際において行はれ、現に詩人の後にその近くに葬られた娘スザナ（即ちホール夫人）の遺骨は後になつてさうした悲運に遭遇し、詩人自身の骨も十九世紀の初め今少しで同じ運命を辿るところであつたのを、夜陰に乗じて會堂内に潜入した一群の發掘者中の幾人かがこの碑銘の呪ひを恐れたために金が中止され、安全であることを得たと傳へられてゐる。尙會堂のなかにはこの碑銘のある床の平石の向つて左脇の壁の稍高い所に詩人の胸像が安置された。この胸像はシェイクスピアの生前恐らく知り合ひであつたと思はれるロンドンの多少名を知られた兄弟の墓師に作らせたものであるが、是がまた或る批評家達の非難失望の的となつた。尙シェイクスピアの肖像は全集の巻頭にあるものと及びその他にもあるが、なほ飽き足らず、或るインテリ貴公子の稍神經質にみえる繪姿（*Henry's Portrait*）に詩人シェイクスピアの眞の面影を求めようとする試みも現れたのである。ともかく會堂内の像に表現されたシェイクスピアは、いはば金持ちの實業家タイプであつて、詩人らしくないといふのである。然し之は注文が無理だと思ふ。類似のことは大學の定年教授達の肖像についても言へるのであつて、眞に學者としての面目を表はすためには、書家その人に學問に對する理解がなくてはならぬ。要するにシェイクスピアの場合、詩人としての彼を理解した胸像作者を求めることは不可能であつたであらう。且シェイクスピアの半面には貨殖にたけた事業家風の所が多分にあつたのであるから、その肖像にさうした面が表現されたのであらう。彼の現世的嗜好の現はれとしては、家の紋章を請ひ得て、*Gentleman*の稱號を使用することを得意とした事實も知られてゐるが、なほ金錢上に於ける彼關係の記録の一つを紹介すれば、彼は故郷の藥種屋に對して、二磅足らずの貸金を取り立てる訴訟を起してゐる。

恐らく當時この種の金銭上の訴訟はいくらもあつたらしく、特に不人情と見る可きものではないらしいが、之が彼の全盛期で、年收四萬六千圓の頃であり、その際二磅、前記の換算率でも僅々二百四十圓の貸金を法律に訴へて取り返さうとしたのは、少なくとも彼ががっちり屋であつたことを示すものとは言ひ得るであらう。此の意味では、彼がボローニアスをしてフランスへ行く息子^のレアーティーズに與へしめた訓誡「借手になるな、貸手になるな。貸金は往々金と一緒に友人を失ひ、借金は儉約の切先きを鈍らす。」といふ言葉は、シェイクスピア自身の交友上の金科玉條でもあつたやうである。(但し彼が投資の手段として、利殖のための金貸をしたことは、前述の通りである。)(『ハムレット』劇からの引用は後でも屢々するつもりであるが、凡て、過ぐる戦災で不幸の死を遂げられた東京帝大文學部助教授澤村寅二郎氏の譯に依る事にする。

かゝる次第で、後世に残されたシェイクスピア傳の材料中には、詩人としての彼を表現するものゝ不足が痛感される。尤も彼が書き残した三十九篇の劇そのものを彼の傳記であるといふ見方もあり、之を四つの時期に區分してその推移を彼の生涯に於ける出來事で説明しようとした所謂浪漫派の解釋もあるが、かゝる見方は英國の文藝批評家の間でも、今日では寧ろ過去のものとなつてゐる。然し抒情詩の場合は、自ら趣が異なるのであつて、作品即ち作者の身邊史といふことがもつと合理的に言はれ得る場合がある。さうして其處から出發して、ブランクのままに残されたシェイクスピア傳の幾頁かを満たさうとする試みが、十四行詩を材料としてなされたのである。彼の一連の抒情詩がかなり早くから書き始められたことは既に述べた。全部で百五十四首のうち、初めの百二十六首は或る青年貴族を主題としたものであり、残りの二十八首の大部分は貞操堅固ならぬ色淺黒の或る貴婦人(Dark Lady)の魅力を讃へたもの

である。第一部の貴公子が誰であるかに就いても、諸説があるが、當面の問題は第二部の女主人公である。之を或る批評家達はオックスフォードの王冠旅館の女將ダヴェナント夫人 (Mrs. Davenant) と見るのである。前にその名を出した初期のシェイクスピア傳の作者の一人たるオーブリはこの夫人デインを a very beautiful woman, and of very good wit と記してゐる。主人のジョン・ダヴェナントは財産もあり、時の主な役人を務めたこともある有力家であつた。シェイクスピアは王室劇團の一員としてオックスフォードへ來る場合及び故郷への往き還りに、この旅館に滞在することがよくあつた。それで同家の家族とも親しい間柄となり、その家の二番目の息子（一六〇六年三月生れ）がウィリアムと命名されたのは、詩人の名を採つたものであり、詩人はその名親であつた。さうしたところからかなり後になつて詩人とダヴェナント夫人との不義關係の噂がうまれ、ウィリアムは詩人の實子だとの巷説が生じたのである。さうしてそれにはこのウィリアムが文人として名を成したことも手傳つてゐるやうである。否寧ろそれがこの流言の原因らしい。即ちウィリアム・ダヴェナントは長じて有名な劇作家となり、勳爵士にされ、月桂冠詩人ともなつた。それで世間には彼がシェイクスピアの血を受けてゐるやうに思ふ者も出て來たらしい。且世間にさうした評判を流布するに至つた一半の責任は月桂冠詩人自身にもあつたやうである。オーブリによれば、彼は酒の上でよく友人達に向つて、僕はシェイクスピアのやうな精神で書くのだと言ひ、彼の子供と考へられることを得意がつたらしい。然しシェイクスピアとダヴェナント夫人とのこの不義關係の噂は、詩人の死後可なりの歳月を経て生じたもので、且ダヴェナント夫婦は終生仲睦じく、殊に妻よりも長命であつた主人は、できるだけ近く妻の脇に葬れと遺言狀に書き記したのであつた。知らぬが佛といふこともあるが、シェイクスピアの十四行詩中の「淺黒の貴婦人」をダヴェナント夫人

と同一視することは、根據不十分の想像と見る可きではあるまいか。殊にダヴェナント夫人はブルネットでなくブロンドであつたやうである。且一方においては、シェイクスピアの是等一群の十四行詩を、客觀的に視る見方もあり得るのである。さうして其處に彼の獨創性を見出すことすらできるのである。即ち彼は先づ、當時行はれた貴婦人に詩を捧ぐる慣習の裏を搔いて貴族の美男子にその大部分を捧げ、歌はれる貴婦人と言へば貞操堅固な金髪色白に限られてゐたのに對して、色淺黒の妖婦にその残りの詩を當てがつたのである。即ち是等十四行詩の一群は時流の裏を行つたシェイクスピアの獨創性を示すものとも考へ得るのである。併し第一部の青年貴族は實在の人物らしい。

以上のやうに見て來ると、天才シェイクスピアの私生涯は如何にも寂寞の感を與へるかもしれない。然しそれがもし事實であれば致方もあるまい。ともかく種々な意味で彼を理想化し、或は神様のやうに祭り上げる時代は英國でもすぎ去つたのである。然し彼の作品の價值は不朽であり、さうした作品を造り出した人間シェイクスピアのすぐれた點は飽くまで之を認めねばならぬ。それでは彼のえらい點は何處に存するのであらうか。

(一) 先づ彼の時代も慥かに良かつた。それは英國がスペインの無敵艦隊を打ち破つて、大いに海外に國力を延ばし、内にはテソーサーがイタリヤで接した文藝復興が英國で開花した時代であつた。然し時代は要するに環境であり、その環境が文豪を生むためには、文豪自身のなかに發展せしめられ得る素質がなくてはならぬ。(二) 次にシェイクスピアは古い材料を利用し改作することに巧であつたことが指摘される。さうして之は疑もなく彼に取つて頗る有利な才能であつた。然し改作は所詮一種の技巧に過ぎず、改作と初めからの創作とに拘らず彼をして立派な作品を残さしめた原因としてはもつと本質的なものがなくてはならぬ。最も彼の改作の手際については、ちがつた考へをもつ學者もあ

るが、この事は後でなほ述べたいと思ふ。(三)それでは彼の天才の本質は何處にあつたかといふと、少なくともその主要な一面は、たしかにその文才にあつたと言ひ得るであらう。文才は人と共に生れる天才であると私は思ふ。尤もそれを十分に展ばすためには、努力も必要であらう。然し文才はたしかに生れつきの素質に據るものとしか私には思へないのである。次の例はシェイクスピアと比較すべきものではないかもしれぬが、私が九大で教へた二百餘名の卒業生中、學者教育家等として自らを築き上げて行く者は多いが、眞の文才と言へるものをもつてゐると思はれる者は、片手の五指を屈め盡す程もないのである。さう私自身にもその才がない。さうしてその才をもつた何れもが、生れつきの素質であるやうに思へる。かうした天稟に關しては、心理學あたりで何か興味ある研究でもあるのであらうか。ともかく詩人シェイクスピアを不朽ならしめる主要條件の一つはその妙文であると思ふ。彼の劇の筋や描いた人物は時代に残り残される時が来るかもしれぬ、否、既にその多くが取り残されてゐると見る人もあらう。然し彼の妙文の魅力は今もなほ生きてゐるのである。又彼の語彙が非常に豊富であつたことも知られてゐる。彼と同時代に譯された欽定譯聖書の語彙が(語尾の變化したものを別語と見ないで)六千五百六十八語、彼の次の時代に最も教養の深かつたミルトンが英詩に使用した語彙が七千乃至八千であつたのに對し、シェイクスピアの語彙は約二萬一千となつてゐる(語尾變化を別に數へないクラーク夫人(Mrs. Clarke)の Concordance に據る)。蓋し英譯聖書の語彙は自ら原語に制約せられ、ミルトンの語彙が比較的少ないのは、彼が潔癖家で且その詩の量と題材が限られてゐたためでもあり、シェイクスピアの語彙の豊富は、彼が非常な發展的の時代に遭遇し、且次に述べるやうな包容力をもつて、當意卽妙、手當り次第にあらゆる材料を自家藥籠中のものとしたためであらう。(四)但し文は要するに人である。シェイク

スピアをして、プロスペロがエリエルを驅使したやうに、かの縦横の靈筆を操らしめたものは、彼の人物であつた。さうして人間シエイクスピアの良さ、大きさは彼が人間を廣く深く知悉してゐた點に存するのである。即ち人間性に關する廣汎且深刻な認識である。私は曾て或る隨筆のなかで、人の性格の分類として、春風駘蕩型と秋霜烈日型とに就いて述べたことがある。前者は例へば絢爛素朴の百花をして各々その所を得しめ、己がじしその特色を發揮せしめる武藏野の春の如く、後者は己が力の及ぶ限り、種々の木の葉を紅のたゞ一色に染めずしては止まぬ秋の霜の如くである。この區別に従へば、ミルトンなどの秋霜烈日型に對し、シエイクスピアは春風駘蕩型であつた。即ち彼を知る人々から「溫雅」と呼ばれ「萬魂」と讃へられた彼は、無限の包容力の持主であり、彼のこの性格、廣い心境は、善人惡黨、王侯匹夫、あらゆる人物を網羅する彼の作品を通觀する場合に最も良くわかるのである。但し彼自身の人生觀は決して無軌道ではなく、彼の四大悲劇には道德律が一貫してゐる。因最後に私は、彼の人格のこの包容力を育んだ、少くともそれを助長した、一つの大きな原因として、彼が俳優であつたことを挙げたいと思ふ。俳優としての彼は、劇作家としての彼程のものではなかつたであらうが、彼が當時一流の役者であつたバーベジと並び稱せられたことは俳優番附によつても知られるのである。但し彼が果して如何なる人物に扮したかの記録は残つてゐない。然し「王の役」に扮したことが傳はつて居り、一説には自作の『ハムレット』のなかで王の幽靈になつたとも言はれてゐる。又彼の弟の一人の口から出たものとして、彼が老人に扮したことが傳へられて居り、若しそれが事實であつたとすれば、その口碑の内容から推して、それは『御意のまゝ』のなかのアダムズであつたと思はれるのであるが、この口碑はあまり信用の置けないものである。但しシエイクスピアが何役に扮したにせよ、又俳優としての彼の技倆がどうで

あつたにせよ、彼が芝居道に屬し、殊に俳優そのものであり、彼をしてその十四行詩の一つのなかで、紺屋の手のやうに自分の性格が扮する人物に染められて行くことを嘆ぜしめたのは、一面彼の包容性が芝居道によつて養はれたことを證するものである。蓋し芝居道程全面的に人間性に即した道は先づないであらう。是に關しては、私の手近にかういふ實例もある。私の知つてゐる或る町内會長で、人を良く見、思ひやりがあつて、非常な信頼を得、人望を博した人があるが、この人は若い時代に或る劇團の支配をしたのであつて、且素人離れのした表情の旨さから判斷すれば、たまには舞臺にも立つたことがあるかもしれぬ。さうして如何にも人情の機微に通じたこの人の人物とこの職業との間には、密接不離の關係があるやうに思はれるのである。

以上極めて不完全ながら、人及び作家としてのシェイクスピアの面影を紹介したつもりである。次には、余す時間をして、彼の劇の一場面を取り、英國におけるシェイクスピア研究の最近の結果を紹介しつゝ、稍詳細に之を觀察して見たいと思ふ。

シェイクスピアが此の世を去つて既に三百年以上を經過した今日では、彼に關する研究は細大洩さずなし盡され、も早後進が割込む余地はないやうに思はれるかもしれぬが、事實はそうではないのである。現に前の歐洲大戰後においても、シェイクスピア研究に關しては、種々の新説や新研究が發表され、その或るものは頗る本質的なものでもあつた。たゞ試みに『ハムレット』劇に關するものだけを見ても、例へばT・S・エリオットがJ・M・ロバートソン (Robertson) 及びE・E・ストール (Stoll) の説に共鳴して言つた所によれば、この劇には、シェイクスピアが古い材料を急いで改作したために、消化しきれない形跡が歴然として居り、従つて「是はシェイクスピアの傑作どころか、藝術的

には確かに失敗の作である。然し彼のこの大膽な斷案は、その後J・ドーヴァー・ウィルソンのこの劇の本文の根本的研究によつて反駁され、シェイクスピアの細心の注意とこの作の眞價とが主張されたのであつた。私はこのウィルソンの研究（彼が他の人の説をも參考に供しつゝ到達した結果）によつて、この劇の最後の場面たる決闘の次第を紹介してこの話を終へようと思ふ。

得現代のシェイクスピア劇の觀客又は讀者の大多數に取り、この決闘は一つの決闘として丈けでも十分の興味を繋ぎるものであるけれども、十七世紀の初め以來ヨーロッパに於ける劍戟の方式は少なからぬ變化をなし、現代の吾々からはその詳細を知るに甚だ困難なものとなつてゐる。さうして近代の『ハムレット』劇研究家のなかで、此の決闘がシェイクスピア時代の舞臺上で實際如何に闘はれ、當時の觀客が如何なる氣持で之を見物したかを、詳細に突き止めようとした人は、前記のドーヴァー・ウィルソン以外には殆んどなかつたのである。然しシェイクスピア時代にハムレットに扮したバーベチは一流の劍士であつたことが知られて居り、その對手としてレアーティーズに扮する俳優も、彼の好敵手となり得るものが選ばれたであらうと思はれるのであるが、ウィルソンの熱心且緻密な研究によつて、此の決闘の實際が可なり微細な點まで判明し、吾々に取つて之が非常に興味あるものとなつたのである。

先づ此の決闘の計畫に就いては、第四幕第七場でクロード・アス王とレアーティーズとの間で話が交はされる。この際王はレアーティーズに向つて、英國から歸つたハムレットはレアーティーズがフランスで劍術の譽を得たことを、フランスから來た者に聞いて嫉妬を起し、レアーティーズと試合をして見たくなつてゐると告げ、二人を決闘させるやうに仕向ける。さうして王はなほレアーティーズに向つて多少煽て氣味に「君は易々と、それともちよつと誤魔化せ

ば、尖を丸めぬ眞剣を選んで、手練の一突きに父の仇を報いることが出来よう。」といふと、レーアティーズはこの奸計に輪をかけて「尙その爲には剣に藥を塗りませう。……それは非常な劇藥で……ほんの擦り傷を受けた者の命さへ助からぬ程です。」と言ふ。然るに王はこの上に令一つを加へ、ハムレットが渴いた際のために毒盃を用意して置くことを告げる。即ちクロード・ブス王とレーアティーズはハムレットを殺すために(一)尖を鈍らさぬ劍、(二)切先に毒を塗ること、(三)毒盃の、三重の計畫をしたわけである。

決闘の事が愈々ハムレットに話されるのは第五幕第二場で、廷臣オズリックを通してである。彼は次のやうに言ふ——
The king, sir, hath laid, sir, that in a dozen passes between yourself and him he shall exceed you three hits. He hath laid on twelve for nine. And it would come to immediate trial, if your lordship would vouchsafe he answer. 簡単な文章であるが、このなかの He hath laid on twelve for nine の He が誰を指すか、又 hath laid on が何を意味するかを概して注釋者によつて誤解されたために、非常にわかり悪いものになつて居たのである。十八世紀の英國文壇の大御所ジョンソン博士も之がわからなかつた一人であつて、彼は(自ら編集した「シェイクスピア脚本集」のなかの註において)オズリックの以上の言葉に關してこう言つてゐる「この賭はわしには解らぬ。十二回の勝負では一方は他方に三本以上か以下勝ち越す外はない。又十二のなかに十二對九があるといふのも、わしには解せぬ。この一節は大切ではない、賭があつたといふことで澤山なのだ。」(This wager I do not comprehend. In a dozen passes one must exceed the other more or less than three hits. Nor can I comprehend how, in a dozen, there can be twelve to nine. The passage is of no importance; it is sufficient that there was a wager.) デンソン博士の

この理解難はウィルソンに言はせると、さきの *He hath laid on twelve for nine. He をオズブリックの言葉の冒頭の The king であると解し、hath laid on を「賭けた」の意味に取つたところから来て居るのである。然しウィルソンに言はせると―私もウィルソンの解釋が正しいと思ふが―この He は數語前の he shall exceed の he で即ちレーティーズを指し、hath laid on は「賭けた」ではなくて「條件をきめた」の意味である。それでさういふやうに取れば、先のオズブリックの言葉は要するに、王様は十二回の勝負でレーティーズ様が三回勝ち越されるといふ賭をされたのです。之に對してレーティーズ様は普通九回の所を十二回勝負といふ條件を持ち出されたのです。御承諾下されば、直ぐ様お試合と云ふことになりませう、といふのである。當時決闘の試合の回數が普通九回であつたことは *George Silver's Paradoxes of Defence* (1599) から判断されるのである。之ならばよくわかる筈である。さうして、十二のなかにどうして十二對九があり得るかわからぬと言つてゐるデモンソンの疑問も、氷解するわけである。然しデモンソン博士の理解難はなほ博士にスポーツの經驗が乏しかつた所からも來てゐる。博士が十二回の勝負では三本以上か以下しか勝ち越せないと言つてゐるのは、數の上では尤も至極である。即ち八對四では四本の勝ち越し、七對五では二本の勝ち越し、十二回ではその中間はあり得ないのであるが、スポーツの規則では十二回ときめても、必ず十二回渡り合ふわけではなく、途中で三本勝ち越す見込がなくなれば、勝負は終るわけである。尙デモンソンはこの文句は大切でないと言つてゐるが、レーティーズの要求によるこの條件は、決闘を観る者には、非常に大切であつて、その條件を完全に理解した筈の當時の觀客は、この決闘の進行を固唾を呑んで見守つたに相違ないのである。*

『ハムレット』が初めて上演された頃、決闘には三つの様式があつた。(一)劍と楯を使用するもの。之は古來の英國

の戦法であつて、片手に短い段平を持ち、他方に軽い楯を持つのである。(二)一振の細身の長剣を使用するもの。右手に長剣を持ち、左手に鎖手袋をはめて敵の剣を防ぎ、あはよくば對手の長剣を捉へて腕ぎ取らうとするのである。(三)細身の長剣と短剣を使用するもの。右手に長剣を、左手に短剣を持つ。但し十六世紀の末迄には英國古來の方式は次第に廢れ、流行を追ふ者は外國から來た長劍戟に適き、長劍戟中でも一本だけよりも、短劍と並用の方が人氣があつた。その證據としては、一六〇〇年のジョン・ノードン(John Norдон)のロンドン市街圖版に、或る野原で片手に細身の長剣をかざし、他の手に短剣を持つて渡り合つてゐるところが描いてあるのを擧ぐることができる。然しこの様式が流行したのは暫らくの事で、一六二三年のシェイクスピアの第一全集が出る前に既に廢れたのであつて、第一全集中の『ハムレット』劇で決闘の道具が持ち込まれる條に、短劍は記してないのである。然しそれより約二十年前に出て、且シェイクスピアの原寫本をもとにしたと思はれる第二「八つ折版」のなかには *Foils* 即ち尖端を鈍らした長劍と共に *daggers* が明記されてゐる。是に由つてみれば、シェイクスピアの『ハムレット』劇が初めて演ぜられた頃には、ハムレットに扮したバーベヂもその對手も、疑ひもなく長劍と短劍を並用したものである。但し此處に *Foils* とあるのは近代の劍戟で使用するやうな尖端にボタンを嵌めたものではない。この目的でボタンが使用されるやうになつたのは、十七世紀も半ばを過ぎた頃からであつて、茲のファイルは刃の鋭さを減じて切先が鈍らされたものであつた。若し是が尖端にボタンの附いたものであれば、レーティーズが是れを取れば、ハムレットにも直ちに發見される筈である。即ちこの時代のファイルは近寄つてよく見なければ、鋭い儘のものとの區別が附きかねるのであつた。

然しレーティーズが鈍らさない劍を先立つて取るためには、オブリックとの間に諒解があつたものと、ウィルソンは

想像してゐる。オズリックはその決闘の審判者の一人であつた。審判者は武具の世話することになつてゐるので、今一人の審判者と共に武器を舞臺に持ち込む際、彼は數本の長劍を抱へて登場し、彼の同僚が（やはり鈍らされた）短劍を持つて出たものの如くである。但しオズリックが運んだ長劍のなかには尖端の鈍らしていないものが一本交へてあつたのであるが、それを合せた幾本かの劍を彼は先づ一方の机の上に置き、次に王の命で彼は決闘者の各々に選ばれるために、机の上から四、五本を取つて前へ出るのである。茲で王は賭のことをハムレットに話しかけながら王子の注意をそらし、その間に先づレーティーズに劍を選ばせるのである。（尤もレーティーズは決闘を挑まれた側として、先に劍を選ぶ権利があつたかもしれぬが、この點はウィルソンもまだ明らかにしてゐない）レーティーズは一本の長劍を取つて一二回突く恰好をして見るが、これは「重すぎる」と言つて、机の所へ行つて鈍らしていないものを取る。

その間にハムレットはオズリックの持つて來たなかの長劍を一つ選ぶ。演劇通のグランヴィル・バーカー (Granville Barker) の考へでは、レーティーズは恐らく此の際礼の上の鋭い劍を取るのみならず、觀客の方を向いてその劍に毒を塗るのである。之は大きな舞臺効果を有するのみならず、レーティーズが今やハムレットを裏切る不正な武具を持つたことを明かにするのである。ともかくレーティーズが先づ鈍らしていない劍を取るためにオズリックとの間に諒解のあつたことは、後でレーティーズが自分の劍で刺されて死ぬ時にオズリックに向つて、「なに、山嶋同様自分のわなにかかつたのさ。人を呪へば穴二つだ。」と言つたことから知られ、且クロード・ディアスがオズリックに對して「試合刀をやつてくれたまへ」といふ際の意味ありげな王の目附でも觀客にわかる筈であると、ウィルソンは言つてゐる。

愈々決闘者はその位置に就く。但しウィルソンがもとのト書きに敷衍したやうにレーティーズは既に身仕度をして

登場したであらうが、ハムレットは先づ上衣を脱ぎ、鎖のシャツ又は胸當を着け、頭巾を被り、鎖の手袋をはめる。眞剣での決闘はたとへ尖端が鈍らされたものでも危険が伴ふので、武裝が必要である。ハムレットがかうして身仕度をしてゐる間に、下僕共は葡萄酒の容器と幾つかのコップとを運んで出る。さうして王の命でコップは王の脇の机の上に置かれる。

愈々決闘が始まる。レーアティーズは前に王が（第四幕第七場の終の方で）勸めたやうに、先づ攻勢に出てハムレットに迫る。然し幾度か突き込んだり防いだりした後で、ハムレットの方が却つて彼の隙を狙つて「見事な一本」を入れる。即ちハムレットは先づ一點を得て一回目の試合を終つたわけである。彼の勝利を祝するために大太鼓が鳴らされ、喇叭が吹奏され、祝砲が發射される。その後で王は彼が特に「わし達の子」と呼ぶハムレットの健康を祈るために葡萄酒を呼ぶ。従者は盃の一つに酒を注ぎ、王は之を飲む。それから見事な眞珠を取り上げ、ハムレットの武勇のために是を彼に與へると言つて、彼はそれを一つのコップのなかに落すものの如くである（「八つ折版」の此處にト書はないが、ウィルソンが考へるやうにさうするものと思はれる。）さうして従者をしてその盃を王子の所へ持つて行かせる。此の眞珠が毒藥であるか、或は毒は他の方法で既に盃に盛られてゐるか、その點は明かでないが、然しともかくそれは致命の毒盃である。然しハムレットは第一回の試合が、劇しいものであつたに拘らず、飲物を取らうとはしないで「先づこの勝負を決めます。暫らくわきへ置いてください。」と言ふ。それでその盃は取り残しの長劍の載せである、ハムレットの後の机の上に置かれ、王は後の機會を待たなくてはならなくなる。

二回目の試合が始まる。レーアティーズの主な目的は、毒を塗つた切先でハムレットを突くことである。手に汗を

握らせる競り合ひが數分間續いて、ハムレットがまた一本入れる。今やハムレットは二本とつたわけであるが、彼は劇しく闘つたにも拘らずなほ姿勢を崩さない。この調子だとレアーティーズが三本勝ち越すことは、頗る困難である。

王はその表面上のチャムピオンたるハムレットの勝味を喜ぶ様を裝つて「ハムレットが勝ちさうだ。」と口には言ふが心の中では毒の切先は遂にハムレットに達せずして終るのではないかと、焦り氣味になる。奸計を知らぬ女王ガートルードは、自分の息子がバリー仕込の達人を壓しつゝあるのを見て喜ぶ。彼女は小憩の間にわが子の所へ來て、彼が少しあへぎ、汗が額から眼へ流れかけてゐるのを見て——之は決闘者には非常な妨である——自分のハンケチを差し出す。同時に女王は自分の直ぐ側の机の上の盃をみ、毒盃とも知らず是を手につづ自ら口を附け、その盃をハムレットに渡す。彼も亦それが毒盃であることはまだ勿論知らないが、經驗を積んだスポーツマンである彼は、運動中に飲料を取るのは汗を増すのみであることを承知してゐるので、「まだ飲むのは控へます。後で」と言つて斷る。

差し止められる間もなく毒盃に口を附けたガートルードを見たクロードiasは、悲痛その極に達する。彼は彼女を眞實に愛してゐる。その愛情には一點の偽もない。かく渾身の愛を對手に注ぎ得たことは、たしかに彼の幸福でもあり、美點でもあつた。然し今や事態は切迫してゐる。彼女がその毒酒を飲んだことは、彼女の死を來す以上の結果を齎すかもしれない。即ちハムレットが手傷も負はないうちに、その盃の正體が暴露するかもしれない。かくて陰謀者の見通しは頗る暗い。女王がハムレットの額の汁を拭ひ、彼と言葉を交はしてゐる間に、レアーティーズはクロードiasに向つて「陛下、今度はやつつけますよ」といふ。今や女王は何時倒れるかもしれないので、レアーティーズはハムレットを突く外に途はないのである。然しレアーティーズの技に信を置けなくなつたクロードiasは、頗る悲觀的に

「どうだかな」と答へる。さうして王のこの疑惑は、それが正しかつたことが實證されるのである。即ち第三回目の試合は引き分けになるが、その経過は次の如くである。

ハムレットは第三回目を始める前にレアーティーズに向つて「君は調子をおろしてゐるな。どうか十分烈しく突込んでくれ。僕を駄々つ子あしらひしてゐるんぢやないか」と半ば揶揄するやうに言ふので、レアーティーズは前よりも烈しい攻勢を取る。然しハムレットは益々機敏で何度突込まれても受け止める。茲で恐らく、ハムレットが對手の特に強い突き込みを防ぎとめた際、レアーティーズの劍の先がハムレットの短劍の櫛の鉤にかゝつて取れなくなり、審判者は二人を引き分けて、どちらも點に這入らないことを宣する。こゝ迄で三回のうち二回ハムレットの勝となり、一回は引き分けであるので、此の調子で六回迄行けば、ハムレット四本といふ結果になることが豫想され、若しさうなつたとすれば、残りの六回をレアーティーズが全部勝ち抜くとしても、三回の勝ち越しは不可能なわけである。

然し五回六回と続ける迄もなく、女王は既に椅子の上で躰が屈みかけてゐるのが見える。しかもハムレットは毒盃に手を附けさうもない。かうなればレアーティーズに残された唯一の手段は、決闘の法則を破る外はなかつた。即ち彼は、三度目の試合が引き分けで終つて、ハムレットがなほ無警戒の状態にあつた際、「そらどうだ」と言つて、ハムレットの腕に負傷させるのである。(一八七八年に有名な劍士ハートン (Alfred Hutton) の指導の下にライシラム座 (Lyceum) でアーヴィング (Irving) がハムレットを演じた際、さうさせたとのことである。) ハムレットは烈火の如く怒る。怒つたハムレットは何をしでかすかもしれないぬ。(彼がレアーティーズの父ポロニアスをそれと知らず刺したのも、怒りにまぎれた狂氣の沙汰であつた。) ハムレットの腕に血がにじんでゐるのは、観客にも見えるのであるが、之

は即ちレアーティーズが法則に反して鋭い切先の劍を持つてゐたことを、ハムレットにも示すものである。ハムレットは是を奪ひ取らうと決心する。彼はレアーティーズに肉迫し、左手の短劍で對手の短劍を拂ひ落し、右手の鈍らした劍を自ら床に捨て、あいた右の手でレアーティーズの劍の櫛を掴み、之をもぎ取るのである。この早わざは大向ふを喰らせるが、ハムレットはその間に皮肉な禮讓を示して、レアーティーズに、落ちてゐる鈍らしたハムレットの劍を拾ひ取らせる。之を見たクロード・ディアスは、その陰謀の仲間レアーティーズを救ふ最後の試みとして、審判者達に向ひ、「引き分けよ。二人は猛り立つてゐる。」と呼ぶが、ハムレットはその手には乗らぬ。彼はレアーティーズに向つて「いや、もう一本いかう」と言ひながら、オズリックが仲に入る前に、レアーティーズから奪ひ取つた劍で彼を刺す。致命傷を負つたレアーティーズは、よろめきながらオズリックの腕に倒れる。即ちハムレットは之で正當に三本取つたことになるのである。

細かな點はちがつてゐるかもしれないが、一六〇一年に地球座で『ハムレット』が演ぜられた時の決闘の場面は、略々以上の如くであつたらう。とウィルソンは言つてゐる。この頃の俳優中には劍道の達人があり、觀客の多くにも劍術の心得があつて、舞臺上の一舉一動に注目してその経過を追つたのであつた。さうして當時の觀衆の興味は、ハムレットとレアーティーズの劍の取り替へへの所で絶頂に達したのであらう。（この劍の取り替へは、レアーティーズの劍の先がハムレットの短劍の櫛の鉤に嵌り込む前述の點と共に、ウィルソンはエヴァン・ジョン（Evan John）と云ふ人の考へ（The Times Literary Supplement の一九三四年一月二十五日號中の讀者通信欄參照）を採用したものであると言つてゐる）然るに近代劇では、この太刀の取り替へは偶然の出來事となつてゐる。即ち拙い競り合ひの結果、二人共

劍を落す。さうして是を拾ひ上げた時には、偶然取り替へてゐたといふやうに、演ぜられるのが常である。且近代の觀客中には特に劍術の心得ある者も殆どなく、決闘は、たゞその間に陰謀が潜んでゐるといふ興味で退屈しないで見て行けるのである。

尙『ハムレット』劇のこの最後の場面の興味は、太刀打ちの技巧だけの問題ではない。觀客は今や、言葉だけでなく實際において敵と闘つてゐるハムレットを見るのである。幽霊が彼に命じて以來、エリザベス朝の觀客の心は、常に王子の右の腕に集中し、是が何時その力を發揮するかを待つてゐたのであるが、茲に初めてその腕が動いてゐるのである。當面の敵は元兇の手先に過ぎないけれども、やがて巨魁の番も廻つて來るであらう。ハムレットは初めは事の真相を知らなかつたが、それは彼にも次第にわかつて來る。殊に觀客には初めからよく知られてゐる。即ち三重の陰謀——鋭い切先、それに塗られた毒、及び毒盃——の事實がハムレットにも少しづつ判明して來る。然し彼は怯まず、悲觀せず、奮闘し続けるのである。彼の腕から血が流れ出した、それは毒を塗られた切先の傷である。即ち彼には死が近づいて居り、悲劇に終らざるを得ないことを觀客は知つてゐる。然し觀客は希望を放棄しない。ハムレットはその目的を遂げて、正義に勝利を得させねばならぬ。姦淫を犯し——ド・ヴァ・ウィルソンによればクロード・ディアスとガートルードとの不義の關係は先王の存命中からであつた——兄を殺した殘忍な怪物を退治して世の中を明るくしなくてはならぬ。しかも觀客のこの希望、この心願は、決して空なものではなかつた。王子は今や自分の劍を棄て、敵の手から鋭い太刀を奪つたのである。此の早わざは觀衆の賞讃の的となるのみならず、大きな期待を生ぜしめるのである。今やハムレットの敵はその掌中にあるのである。王子は急に背丈が延びたやうに見える。情勢もよくなつたが、

王子の態度も立派になつた。彼は全く狂態を脱して正氣を示し、同時に彼の敵に對する寛大な態度は、吾々をして彼の弱點を忘れしめるに十分である。彼は今や偉大な姿となつて吾々の眼前にある。彼の力、強さがこれ程までに發揮されたことは曾てなかつたのである。

聊かの躊躇なく彼がレアーティーズを刺した態度は、次に何が来るかを觀客に豫想せしめた。女王はやがて、皮肉にも夫が用意した毒藥がめぐつて倒れるが、飽くまで世智にたけたクロード・ディアスは、それを、血を見て氣が遠くなつたのだと説明する。然し女王は、最後の息で、盃に注意すべきことを息子に告げる。さうして女王が「私は毒殺された。」と言つて息絶えた時、ハムレットが「やあ怪しからん！おい！戸に錠をかけよ。企らみがある！探し出せ。」と叫ぶ聲には怒りと悲みが同時にあふれてゐる。彼は既に陰謀のありかを知つてゐる。クロード・ディアスは逃れることは不可能である。然しなほ委しい事情はレアーティーズの口から語られる。彼は死に臨んで、毒を塗つた刃の陰謀を告白し「王だ王だ、不都合なのは」と叫ぶ。そこでハムレットは毒の附いた拔身を提げて叔父のクロード・ディアスに迫る。今やハムレットの血管には毒の作用が感ぜられ、彼の最後はも早や半時間に迫つてゐる。この頻死の王子は「不倫殘虐非道の國王」クロード・ディアスを毒を塗つた刃で刺し、續いて彼に強ひて毒酒を飲ませるのである。さうしてハムレットが「貴様の眞珠はこのなかにあるのか？母の跡を追へ」といふのを聞きながらクロード・ディアスは息が絶える。

デンマークの王子ハムレットの仕事は之で終つた。この使命を果したハムレットはレアーティーズと互に赦し合ひ、さうして彼に残された僅かの時は、彼が自ら繼承し得ぬデンマークの王位の將來のためと、彼自身の潔白を後世に傳へる目的のために使用される。母なる女王も此の世を去つた今では、事の眞相を世間に發表しても何の差支へもなく、

さうして之がハムレットに取つて如何に大切であるかは、親友ホレイシが毒酒の残りを飲んで、ハムレットと共に死なうとするのを制して、その盃を床にたきつけた彼の行動からも判斷されるのである。王子は親友ホレイシに向つて「假にも僕を本當に愛したことがあるなら、暫らく天上の歡びをよそにして、この憂き世に苦しい命を永らへて僕の事情を話してくれ」と頼む。シェイクスピアに關しては、世を去り行く人々に語らせる言葉の當を得てゐることにおいても、定評があるが、ハムレットの臨終の語はそのなかでも白眉である。是はホレイシが生き残つて語り得る以上に王子の物語を語るものである。さうして是はまた今やその目的を果したハムレットは吾々がこの肉の衣を脱ぎ棄てる時、如何なる夢が吾等を待つてゐるかも早や恐れぬハムレットであることを示してゐる。ノルウェイの王子フィーテンブラスをデンマークの王位後繼者に推し、「おとは無言」と言つて、彼の世へ急いだハムレットをホレイシは次の言葉で送つたのである——「高潔な心が今ぞ碎ける。さらば眠りたまへ。やさしい貴公子。」